

的な対応だけでなく、そうしたニーズを生み出す前の予防が大切であること、そして、そのための取り組みを法人単体でなく、地域のさまざまな社会資源と連携しながら展開していくことの必要性を確認し、2015(平成27)年より、「れいんぼう」と名づけられた新たな公益活動を開始しました。母子が社会との接点を持ちながら「生きる力を身につける」こと、また、いくつになっても何度でもやり直しができることを知ってほしいとの願いを込め、長年の母子に対する支援の経験を踏まえて、「学ぶ」「食す」「健康(動く)」「体験する」の4つの柱に対応したプログラムを組み立て、まずは区内のひとり親家庭の小・中学生の子どもたちを対象としたプロジェクト「Kidsれいんぼう」から活動をスタートしました。子どもの貧困がもたらす課題の解決や異世代交流を目的に掲げ、地域社協や区内2つの社会福祉法人と連携して、漢字や英語、PCなどの検定・資格取得を目指す学習プログラムのほか、調理や体験のプログラムを2か所の拠点で展開しています。学習プログラムでは明治大学社会福祉研究部の学生がボランティアとして活躍し、また体験プログラムでは、地元企業や地域の自治会等の協力を得て、プロバスケットボールの試合や飛行機整備工場の見学、海苔つけ体験、盆踊りの参加等を通じて、地域のさまざまな人たちと交流する機会をもっています。昨年度は合計で前期52回・後期49回、通期合計で延べ539人の子どもたちが参加しました。

翌2016(平成28)年からは、15～34歳までの子どもや若者を対象とした「JOYれいんぼう」と、ひとり親の母親を対象にした「ママれいんぼう」の活動がスタートしました。

「JOYれいんぼう」では、子どもや若者にとって学校や家庭以外の「居場所」を提供するとともに、「生きる力」を育むための生活支援を中心に、高校卒業や高卒認定試験対策、PC検定や漢字検定に向けた学習支援、就職活動を応援する就労支援を展開しています。地域の社会福祉法人や保育園、専門学校等の協力のもと、クリスマス会に招かれてのハンドベル演奏や保育士体験、オープンキャンパスへの参加を通じた進学体験等の訪問体験プログラムを含め、昨年度は56回を実施し、延べ132人が参加しました。

「ママれいんぼう」では、就労につながる資格取得のための学習就労プログラムのほか、就労支援・健康支援・生活支援を軸とした生活支援プログラム、地域社協や区内の社会福祉法人、大田区生活再建就労サポートセンター等の協力のもとでのさまざまな体験プログラムを通して、参加者が自分らしい自立のステップを経験できるように配慮されています。学習支援プログラムでは、適性検査を行い、その結果を踏まえて参加者と面談を行い、意向を把握したうえでコース選択を行っています。生活プログラムでは、採用面接時に自信がもてるよう、パーソナルカラー診断や就活メイク講座のほか、ヨガやハンドマッサージなどの

リラックス法の習得、家計簿管理や手芸、調理などの講座・講習等を実施しています。昨年度は2か所の拠点で合計52回のプログラムを実施し、延べ227人が参加しました。

「Kidsれいんぼう」や「JOYれいんぼう」の参加者には被虐待体験や発達障害のある子ども、外国籍の子どもも含まれ、いじめを受けたり学習の遅れから不登校やひきこもりの状態にあった子どもや若者たちが活動を通じて自信を回復し、学校生活に復帰した事例が報告されています。また、「ママれいんぼう」では、高校中退(中卒)、若年妊娠、DV被害、児童養護施設出身、外国籍といった社会生活上の不利を複合的に抱えるなかで、将来をあきらめてしまっていた母親たちがプログラムを通じて簿記検定や看護学校の入学試験に合格したり、介護職員初任者研修の受講資格を取得し、正規雇用につながった事例が生まれています。そして、それを支える職員にも「伴走者」としての自覚が芽生え、支援の視点の広がりといった効果が表れ始めているといえます。

3. まとめに代えて

「おおたスマイルプロジェクト」は、社会福祉法人制度改革を先取りしたかたちでの地域における公益的な取り組みであるとともに、そのきっかけとなった大洋社の「緊急対応よりも予防を」という発想は、日本の生協運動の父といわれる賀川豊彦が提唱し実践した「救貧から防貧へ」の思想に通じるものがあると感じました。

私の地元の世田谷区では、三軒茶屋就労支援センターや池尻にある世田谷若者総合支援センターを中心に、行政が主導するかたちでひとり親家庭や若者支援を行っています。大田区では、「おおたスマイルプロジェクト」のほか、大田区発の地域包括ケアシステム「おおた高齢者見守りネットワーク(みま～も)」などの活動が民間主導で進んでおり、「住民主体の地域づくり」を進めるうえで、大田区の取り組みから学ぶところはとても大きいと感じました。

この研修の後、齋藤常務理事にご無理をいって、他の2名の評価者とともに「大田区立ひまわり苑」を見学させていただきました。お忙しいなか、貴重な資料に基づいて、ごといねいに説明していただいた齋藤常務理事に対し、この場をお借りして深くお礼申し上げます。

みなさまからの
社会福祉情報お待ちしております。(編)
メールアドレス: smile-npo@smile.meiai.org
*HPアドレス: www.meial.org/

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-31-9
シーバード五反田401
(03)3494・9033
NPO法人メイアイヘルプユー

情報の開示・事業の透明性を考える ～「イギリス研修からの学び」～

代表理事 新津ふみ子

イギリス・ロンドンとその近郊都市で医療依存度の高い小児や障害者への在宅支援について視察・研修をしてきました。

わが国では、毎日の生活を送るためにさまざまな医療的ケアが必要になる子どもの数が急速に増加しています。子どもに対する支援の特徴として、中村知夫氏*は「多くの小児在宅患者への支援の目的は、高齢者の看取りとは異なり、発達支援、教育支援、就労支援である。さらに小児在宅医療を受けている子どもたちも長く生きることができるようになり、保護者が介護できなくなる時期や、保護者と死別した後の支援も考えてゆく必要がある。障害者総合支援法、児童福祉法と、その他介護保険にも及ぶ、長期にわたる支援を計画、立案、実施してゆく必要も出てきているが、まだ未整備の部分が多い」と述べています。

視察先は、以下のとおりでした。

- ①障害のある子どもたちの学校(公立):2歳から19歳までが通学(特別支援学校)
- ②訪問サービスの提供:重い病気や末期の状態の子どもを持つ家族を様々な面から支援しているチャリティ団体
- ③屋内、屋外両方の遊戯施設の提供:病気や障害などで特別なケアが必要な子どもを中心に、週1日は15歳以上の大人が利用、チャリティ団体が実施
- ④子どもを対象とした2つのホームポスピス、チャリティ団体が実施

*:国立成育医療研究センター 総合診療部 在宅診療科 医長、医療連携・患者支援センター 在宅医療支援室 室長

講義としては、以下の内容がありました。

- ①マクミランナース(ターミナルケア認定看護師):2003年からイギリスで活動している、マクミラン緩和ケアクリニックナーススペシャリストの活動について
- ②在英日本大使館一等書記官:主にNHS(国民保健サービス)の概要について

◇

視察を通しての学びです。

改めて子どもは成長すること、そのときに欠かせないことは、遊び、それも多様であることを強く感じました。そして、人間が生きて行くときの助け合いとしてチャリティ活動が欠かせない、改めて自分の課題にしたいと思いました。

また、小児分野への関心を深め、積極的にかかわり、子どもたちの存在と現状を社会に訴え、医療・看護・福祉分野にわたり子どものたちの生活を支える基盤整備に積極的に関与することが必要だと思いました。

●事業の情報開示と透明性の確保の視点で

在英日本大使館一等書記官の講義のなかで、私がとくに学んだこと、それは情報の開示です。イギリスの社会保障制度は、医療制度、介護制度(社会福祉サービス)、年金制度からなります。

医療制度は1948年に創設されたイギリス保健省が管轄する「国民保健サービス(NHS)」によって、すべての住民に疾病予防やリハビリテーションを含めた包括的な医療サービスを税財源により原則無料で提供し、医療受診は救急の場合を除き、あらかじめ登録した一般医(General Practitioner:GP)を受診してから、その判断で病院にかかる仕組みであり、GPが国民の健康状態をコントロールする窓口としての役割を果たしています。

介護制度のサービスは、税に基づき地方自治体が介護サービスを提供(低所得者を除き自己負担あり)します。

50号の ガイド

- 1～2P:情報の開示・事業の透明性を考える～「イギリス研修からの学び」～
- 2～3P:石川県 佛子園 視察報告
- 3～4P:8月内部研修会報告

◆『厚生福祉』(第6347号)の巻頭言「保育所作りに反対する人」を執筆者の齋藤芳雄さんからご提供いただきましたので会報に同封します。(編)



地方自治体が介護の必要度を測定し、個人ごとに予算を策定していますが、私の印象では、わが国の介護保険で提供しているサービス頻度や内容と比較し、イギリスは税に基づき介護サービスを提供するので、範囲が限定的にならざるを得ない状況があり、きめ細かいサービスはチャリティ団体が担っているように思えました。

また、実に情報公開が進んでいます。NHSには、保健・社会ケアの独自の規制機関があり、“健康と社会福祉サービスを監視、検査、規制をし、人々がケアを選ぶのを助ける評価を含めて、私たちが見つけたものを公表する”とし、年数回の評価をしてその内容を公開しています。国民を対象とする「GPに関するアンケート調査」も実施して、結果を公開しているそうです。税を財源としたサービスであり、当然なのかもしれませんが。言い換えれば財源の効果的な使い方をチェックしているといえます。わが国の監査のようなものなのでしょうか。でもわが国では、監査の結果は公開されていませんよね。いいえ、国民からのアンケート調査とその公開を見ると、わが国の監査とは違いますね。

福祉サービスの第三者評価の目的の一つに“評価結果を公表することで、福祉サービスの利用を希望される方や、家族が福祉サービスを選択するための情報源の一つになる”と明示されています。受審した場合は、WAMネットや都道府県のホームページなどに公開されていますが、受審率が低く、評価機関の裁量(受審事業所との合意が必要)による評価・判断との違いがあります。

今年度は、第三連(一般社団法人全国福祉サービス第三者評価調査者連絡会)では、「利用者のサービス選択に資する福祉サービス第三者評価の在り方に関する調査研究」(厚生労働省社会・援護局:平成29年度社会福祉推進事業)に取り組んでいます。受審事業所と評価機関、推進組織へのアンケート調査やヒヤリングを実施し、積極的に、そして多様な方法で公開・公表してゆく道筋を考えたいと思います。

＊

長渕剛が5年3か月ぶりのニューアルバム「BLACK TRAIN」を出しました。そのなかに「Can you hear me?」という一曲があります。子どもたちが大人にCan you hear me? と訴えているよう感じます。思い切り、子どもたちの声に心を傾けてゆこうと思いました。

石川県 佛子園 視察報告

浜松市医師会 在宅医療推進員 山下いづみ

いま、共生社会という言葉が、いたるところで聞かれている。高齢者が増えることは周知の事実であり、どちらかというとも、高齢者ケアの現場での仕事が長かった。しかし、生活は、本来いろいろな年齢や属性の人がいるわけで、高齢者だけ、障がい者だけという区別は、本来であれば必要ないはずである。さらに、ケアを受ける人、ケアを提供する人という区別も必要ない。それを、実践しているのが、ここ佛子園だった。それを「ごちゃませ」という言葉で表現しており、いくつかの施設やそこでの働き方や生活ぶりを視察することで、それを実感することができた。

9月26日(火)、朝早く東京駅から北陸新幹線に乗り、金沢に向かった。現地で合流し、総勢7名が視察に向かった。法人理事の村岡さんが案内役であった。

佛子園の活動は、ご存じの方も多いと思うが、障がい児者の入居施設から事業を開始している。地域の人たちとも一緒に活動できるようにと、工夫と地域との対話を重ねて、いまのような施設運営に発展してきているという。最初の視察地、西園寺の活動から、その様子が見えてきた。

最初の学びである。地域に存在する資源を最大限活用し、その地域で求められていることを、地域住民とともに考え、実施していく。そのなかに、福祉拠点があったのである。全世代に及ぶ「地域包括ケア」である。

西園寺は、廃寺となってしまった建物を利用している。お寺を活用することは住民にも期待があり、その改装が実現し、現在は就労継続支援B型・生活介護・高齢者デイを運営している。しかし、ここまでの道のりには、地域住民との対話が何度となく交わされ、地域に根差した施設づくりに傾注してきたことが特徴であった。それを具現化するために、地域の方が自由に利用できる温泉やカフェを備えている。この温泉やカフェは、利用者も住民も共同で使用するものであり、視察時も、地元のご夫婦が訪れ、温泉に入った後、食事をされていた。私たちもその横で、やはり昼食をいただいた。そこで働く人は、スタッフのみならず、就労支援で通っている若者、地域のボランティアなど多彩である。誰が利用者で誰がスタッフで、誰が入浴だけに来た人なのかかわからない。もと本堂だというリビングルームに吹き抜ける心地よい

風のように、自然に時間が流れる場所であった。

次の学びは、ここでの人づくりである。労働集約型の事業では、人はまさしく「人材」であることは、誰でも理解している。活力みなぎる、若い人材育成に特徴があったのだ。

①年に1回、新規事業提案を、全職員が実施。これには、勤続年数や先輩後輩などというしがらみもない。よい提案は、採用され事業化されていく。

②採用された企画は、最初から最後まで提案者がリーダーシップをとり、具体化していくという。予算どりを含め、すべての責任を担っていくのだそうだ。補助金を獲得できる事業であれば、その折衝もまかされる。誰も初めのことであっても、果敢に挑戦し、経験という栄養を自分につけていくことができる。

西園寺で出会った若くて美しい管理者も、隣接する敷地にフィットネスクラブを運営する提案が採用された。改築中の建物を見ながら、事業成功のために奮闘していた。

その後は、次の施設を巡った。

「美川37(みんな)Work」では、駅舎の清掃を受託して、駅舎の美化に貢献している就労支援施設。もちろん待合カフェもあり、電車に乗り遅れたくなりそうな環境であった。

「B's」は法人本部施設を要する敷地に、多様な施設がある。行善寺温泉、行善寺やぶ蕎麦と、やはり地域住民が自由に出入りできる施設を要し、誰が誰だかわからない「ごちゃませ」だけれど、ゆったりできる空間が広がっていた。一生懸命に廊下の掃除をしてくれていた就労支援施設に通ってきている青年の働きぶりが印象的であった。

最後は「Share金沢」。誰もが、できることを提供して「共に暮らしあう街」づくりを実現している場所だ。敷地全体を

ゆっくり歩くと、1周約20分程度の街並みには、多彩な世代を迎え入れる建物が並んでいる。近所に住んでいるのだろうか、敷地内にあるアルパカ牧場にいるアルパカ目当てで、散歩していた親子ともすれ違った。

最後は、敷地内のレストランで夕食兼反省会。スタッフの心のこもった料理と、気遣いを満喫しながら、1日を締めくくった。

地域とともに生きているスタッフの姿、ぶれない施設づくりを目の当たりに視察させていただき、書物やホームページからの発信だけでは知りえない多くのことを学んだ1日であった。

視察先でお世話になったみなさんに感謝して、結びの言葉としたい。

8月内部研修会報告

TOKYOおおたスマイルプロジェクト ～ある母子生活支援施設の地域連携の試み～ 合同会社フェアリンク 代表社員 加藤浩之

1. はじめに

8月24日の内部研修で、社会福祉法人 大洋社 常務理事の齋藤弘美さんのお話を聞く機会に恵まれました。齋藤さんは、お祖母様が1942(昭和17)年に始められた母子寮で利用者とともに子ども時代を過ごされたとのこと。施設で育つなかであたり前と思っていたことが、一般社会ではそうでなかったという経験がいろいろな生活場面であったそうです。

法人の創設者である片山ハルエ氏は、教員時代の大正11年に女子および母子家庭の自立を応援したいという思いから事業を始められ、開設以来、「世界はひろし母の愛」という言葉を法人の根幹として、弱い立場に陥りがちな女性や母親、将来を担う子どもたちのいまを守るために身を捧げられました。その後、財団法人 日の丸厚生会を経て、昭和27年に社会福祉法人 大洋社となりました。現在は、東京都大田区に本部をおき、子ども家庭福祉領域の10事業を、母子事業部と保育園事業部の2事業部制で運営されています。開設当初の想いと「家族福祉」「地域福祉」をテーマに家族が地域で生活できるよう、地域公益活動も積極的に推進されています。今回のお話のテーマである「おおたスマイルプロジェクト」は、地域社協や近隣の社会福祉法人と連携した先進的な取り組みとして注目を集めています。

2. 「おおたスマイルプロジェクト」とは

「おおたスマイルプロジェクト」の拠点の一つである大田区立ひまわり苑は利用定員20世帯の母子生活支援施設で、あわせて母子と単身女性の緊急一時保護事業および地域の子育て支援事業(ショートステイ、トワイライトステイ、デイサービス)を行っています。

ひまわり苑のある大田区は23区のなかで最も面積が大きく、人口は約71万人で微増傾向にあります。地域間の格差はありますが、単身独居世帯やひとり親世帯が増えており、児童虐待やDV(ドメスティックバイオレンス)の件数も増加傾向にあるとのこと。その一方、自治会の加入率が23区で最も高いことでも知られています。

大洋社では事業開始百周年を迎えるにあたり、地域で深刻化するひとり親家庭の貧困や孤立といった問題に直面するなかで、支援を必要とする人々を救うための緊急